

フィリピンにおける民族楽器の調査

八 代 秀 夫

第一章

楽器分類法について (Classification of musical Instruments)

民族楽器を調査すると言うことは楽器学, Organology の体系的分類学に従っていくつかのグループにあてはめ把握し, 又それらの中から民族の特徴を抽出しなければならない。

しかし楽器と言う言葉は Instrument, Zeug, Organo などのように道具, 器具, 材料などの意味を持っている。古代中国で行われた楽器の分類法は「金, 糸, 竹, 石, 匏¹, 土, 草, 木」のように楽器の構成材を8種類にわけた「八音」があり, 又現代のオーケストラの楽器分類法に近い「金属楽器, 木管楽器, 弦楽器, 太鼓」の4分類法²がインドはすでに13世紀頃より行われていた。

現在の楽器学の基礎となっている発音体による4分類法を提唱したのはベルギーのマイヨン Victor Mahillon だがその後ドイツのホルンボステル Erich, M, von Hornbostel とザックス Curt Sachs により改良され, 新しく電気楽器を加え5分類法となり拡く用いられるようになった。これをマイヨン, ホルンボステル, ザックスの頭文字をとってMHS法と呼ばれている。

それは次のように分けられている。

- | | |
|----------------------|------|
| (I) Idiophones | 体鳴楽器 |
| (II) Acrophones | 気鳴楽器 |
| (III) Membranophones | 膜鳴楽器 |
| (IV) Chordophones | 弦鳴楽器 |
| (V) Electrophones | 電気楽器 |

しかし最近ではMHS法の気鳴楽器をフルートのように直接歌口に気流が当てられるものとオーボエ, クラリネットなどのように途中にリード(簧)がまず鳴るようなものははっきり分け6分類されているものもある。その時は気鳴楽器に対して簧鳴楽器と云われるが今回は気鳴楽器に含めておく。

次に各部門を細分類する場合は発音原理以外の幾多の要素, 例えば音響学的原理, 音エネルギーの力学的分類, 使用した材質による分類, 或は演奏の形態や演奏法に於ける分類などの系列が考えられる。又社会学, 心理学と共に文化人類学にも幾多のかかわりあいがあり, 体系的細分法は近年色々な角度から行われているのにもかかわらず, 多くの専門的音楽学者によって認められるようなものは殆どないと云ってよい位である³。

次に民族楽器を記述する立場からMHS法の下位分類を示さなければならないが, デューイ式のコード⁴をふくめた形は大変複雑すぎて問題の本質がわかりにくくなるのでザックス自身

が修正した最終的な分類法を述べる。[Sachs 1940年 454~467ページ]

Idiophones 体鳴楽器

- | | |
|-----------------------------------|-----------------|
| (1) Idiophones struck together | シンバルなど。 |
| (2) Struck idiophones | 木琴など。 |
| (3) Stamped idiophones | 割れ目太鼓など。 |
| (4) Stamping idiophones | 筒やひょうたんで地面をたたく。 |
| (5) Shaken idiophones | ガラガラなど。 |
| (6) Scraped idiophones | 固いもので貝や骨をこする。 |
| (7) Plucked idiophones | 口琴など。 |
| (8) Rubbed or friction idiophones | こする。 |

Aerophones 気鳴楽器

- | | |
|------------------------|------------|
| (1) Trumpets and horns | トランペットなど。 |
| (2) Pipes | フルートなど。 |
| (3) Free aerophones | アコーディオンなど。 |

Membranophones 膜鳴楽器

- | | |
|----------------------------|-----------|
| (1) Material | 材料による。 |
| (2) Shape | 形態による。 |
| (3) Skins | 1面か2面かなど。 |
| (4) Fastening of the skins | とりつけ方。 |
| (5) The playing positions | 演奏の状態。 |
| (6) The manner of playing | 演奏の方法。 |

Chordophones 弦鳴楽器

- | | |
|--------------|---------|
| (1) A zither | チターなど。 |
| (2) A lute | リュートなど。 |
| (3) A lyre | リラなど。 |
| (4) The harp | ハープなど。 |

Electrophones 電気楽器

- | | |
|-----------------------------------|-----------------|
| (1) Electromechanical instruments | エレキギターなど。 |
| (2) Radioelectric instruments | 発振装置によるキーボードなど。 |

その他に非ヨーロッパ系の楽器 *Aussereuropäische Instrumente* の項目を設けて前記の4分類法に従って民族楽器をあてはめている。しかし現在の民族音楽における楽器の発生状態や演奏法から見て発音体原理だけではどうにも説明のつかない点も多く、又実際に狩猟に使われている弓を楽器として使われることもあるがこの場合弓の^{つる}弦^{つる}いと材料によって直接指ではじいたり、他の物体でたたいたり又他の弦をこすったりする。

第二章

フィリピンにおける比較音楽学の立場 (Situation of Comparative Musicology in Philippine)

フィリピンはマジェラン Ferdinand Magellan⁵ がやってきた1521年以前は恐らく最後の永河期に陸橋を渡って東南アジアからやってきたと思われるネグリート達や稲作を基礎に定着することの出来たプロト・マレー人達が居た。その後インドネシア系マレー人達が紀元 300 年には沿岸地帯にほぼ定着、15世紀に到るまで中国、インド、日本などと交渉があった。南部諸島ではサンスクリット語で意味が通じ、インドのアルファベットを使い歴法、度量衡も使っていた。

日本書記に「孝徳天皇白雉五年四月吐火羅（とから）国の男二人，女二人，風に流されて日向に来る」。斉明紀三年に「靚貨邏（とから）国の男一人，女四人，筑紫に漂泊す」。「とから」はフィリピンのタガログ（ルソン島マニラ周辺）のことであり、「白雉五年舍衛の女一人風に流されて日向に来る」。というのも「しやえ」はビサヤ（フィリピン中部地方の島々）であろうと云われている。（松波仁一郎博士ほか）

紀元 500 年以来イスラム教が南部の島々に伝わり高度なイスラム文化をもたらした。

このようなことはフィリピン以外の他の東南アジアの地域や附近の諸島についても全く同様なことが見られるのであり、スペインの植民地支配が行われる以前は果してこの地域に国家として認め得るような統一性があったのであろうか。それについてフィリピン独立の父と云われるホセ・リサル José Rizal が始めてスペインに征服される前のフィリピン諸島にも共通の文化と云われるようなものが存在していたことを認めている。

しかし現在のフィリピンは北緯 5 度から 21 度にわたり、南北約 1850 キロ、東西約 1100 キロのほぼ三角形の地域には大小 7 千以上の島々があり言語、習慣には必ずしも同一性が顕著に見られるわけではない。

しかしそこにおいて基礎社会の共通文化の基盤となるべき土壌が存在したと云われるものはバランガイ社会と呼ばれるものである。

海岸や河川の流域に部落をなして住んでいる小さな集団をバランガイと云うが、通常数十戸単位の家族で構成され生産や生活の場である一定の地域を守っていたのである。しかしこれらバランガイの住人たちは決して専制的な支配者により統治されていたわけではなく、又それらを統一するような政治組織はごく一部をのぞいては存在していなかった。

ただバランガイ間の争いを仲裁する一種の法的共同体制があったことも事実である。それには四つの社会階層が存在したことを知らねばならない。指導者であるダトと自由民テイマガそれに従属階層としてのアリピンとナマハイである。ダトはバランガイの統率者ではあるがバランガイ内の争いに対して別のバランガイから調停者を迎えて仲裁を受けることが出来た。

又アニミズム的の精霊神信仰はバランガイの重要な行事であり、精神的な結びつきであった。そしてそこに吾々は幾多の信仰と祭礼に使われる民族的音楽を見出すことが出来る。

バランガイ社会はこの地域に織布技術や金属器文化がもたらされた紀元前 4・500 年にさかのぼることが出来ると云われているが実際には 10 世紀あたりの中国・アラブとの接触やインドネ

シアから流入したインド文化などの影響によりフィリピン全体の文化の均質化を促がしたとも云える。

この様な状態からは決して西欧社会のイメージにおける国家と云うものにはくられられないが大小の島々にのみ住んでいる人々の共通の民族的基盤の上では重要な意義を持っている。

今日のフィリピンの山中深く住んでいる原始民族の一つといわれるネグリート族⁶はセイロン、アンダマン諸島、マライ半島にも定住しているし、フィリピン中部に多いモンゴロ系マライ人はスマトラ、ジャワなどインドネシア一帯に居住している。これらの種族の中には又われわれの生活の上で漢民族などよりもっと強い影響を日本民族の上にも感じさせるのである。

しかし今日のフィリピンでは土俗的に40以上の種族にわかれて居り、言語は90以上にも達するといわれ、比較音楽学の立場からも多様性が著しいといわざるを得ない。

そこで私は最も土俗的な風俗習慣が残され西洋文明の洗礼を受けることの少ない種族を次のように分類した。〔サンカルロス大学の資料による〕

人口の90%以上がクリスチャンといわれる現代のフィリピンの中で非キリスト教徒の種族を主な島々に分けてみると次のようになる。〈地図参照〉

少数民族の文化はフィリピン全人口の約12%でありその数は約400万人と推定される。そしてその3/4はミンダナオ以南のモロ族たちである。

I LUZON ルソン島

■ Negrito

1. Isneg (Apayao)
2. Kalinga
3. Bontoc
4. Ifgao
5. Kankanai
6. Ibaloi
7. Tinguian (Itneg)
8. Gaddang
9. Ilongot

III VISAYAS ビサヤ諸島

■ Negrito

1. Sulod
2. Bukidnon

II MINDORO ミンドロ島

1. Iraya
2. Nauhan
3. Buwid
4. Buhid
5. Ratagnon
6. Hanunoo

IV PALAWAN パラワン島

— Pagan groups 異教徒

1. Batak
2. Tagbanua
3. Palawani

— Muslim groups 回教徒

4. Molbog

V MINDANAO ミンダナオ島

■ Negrito

— Pagan groups

1. Manobo
2. Bukidnon
3. Subanon
4. Manggungan
5. Mandaya (Mansaka)
6. Ata
7. Bagobo
8. Isamal
9. Tagakaolo

10. Tiruray

11. Bilaan

12. Tagabili

13. Tasadai

— Muslim groups

A. Maranao

B. Maguindanao

C. Sangil

D. Yakan

E. Tausug

F. Samal

G. Badjaw

これらの中にはV—13の Tasadai (タサダイ或はタサディ) のように現代に残された石器時代人の発見で一躍有名になったものもある。ミンダナオ島南部高地コタバト Cotabato の北の山中のほら穴に住んでいる穴居人類 Troglodyte と云われるものだが1971年に発見以来現在のところ一部落と接触があっただけで24人だけ確認されている。一説によると26人と云う。

又一方 100 万人以上居るモロ族はミンダナオ島とスルー諸島 Sulu Archipelago に住む幾つかの部族で独自の言語と伝統に生きている。本来は陸地より少しはなれた海上で杭上生活をしているが海賊や山に入って山賊となり現在でもフィリピン政府に対して征服されて居らずしばしばゲリラ活動が続けている。文化的少数民族 Cultural — minority の上に外来したイスラム教が14世紀後半、ホロ島 Jolo に形成され16世紀には南部のスルー諸島からミンダナオ島一帯、それにルソン島のマニラ周辺にモロ族によるイスラム社会が出来上った。

1571年にマニラ付近のイスラム社会はスペイン軍との戦いで潰えてしまったが、三世紀にわたるスペイン植民地時代は勿論、アメリカの支配から現在のマルコス独裁政権に到るまで南部のイスラム社会を征服出来なかった許りでなく今現在でもその戦いは続いているのである。最近では1972年10月からスルー諸島やミンダナオでは内戦が続いて居り76年12月によりやうく和平、南部13州は自治に入ったが77年以来武装抵抗をともなった独立運動にまで発展している。

このような政治情勢の中で南部諸島の民族音楽を研究しようとすることは大変制約がともなうがフィリピンのたどってきた歴史はルソン・ビサヤ諸島中心のキリスト教社会と国土の大部分をしめる山岳地方のアミズム社会、それに点でしか捕えていないキリスト教社会をのぞく南部の他のイスラム社会と三つの異った宗教文化圏が存在することはその接点の状態を知るだけでも大変興味ある問題である。

又言語の問題でも90だけではなく200の小さなグループに分けられるとも云われ充分な調査が進んでいるとは云い難い。ルソン中部で使われているタガログ語を共通語として採用しているが各地の主要な語葉はセブアノ・イロコ・ヒリガイノン・ビコール・サマル＝レイテ・パンパンガン・パンガシナンと八つもありこれらの地方ではフィリピン語と云はれるタガログは

通じない。アメリカ統治時代は英語を公共語として強制したがこれは今日でも各地の初等教育の学校では行われている。

第三章

東南アジア音楽文化とフィリピン (Music of South East Asia and Philippine)

東南アジアの音楽は偉大なる文明国中国の音楽と紀元前後から移民を送り出していたインドの音楽の影響は到るところに感じられるが決してそれらが主流とはなっていない。又殖民地化された国々が本国の音楽をとり入れたものもフィリピンをのぞいては皆無である。つまりビルマやマレーシアにイギリスの音楽が、ラオス・カンボジア・ベトナムにはフランスの音楽が、インドネシアにはオランダの音楽の影響は全く見られない。ひとりフィリピンだけは到る所にスペインとアメリカの影響を見、或はカソリックのミサから始まって市井のダンス音楽に到る迄もう彼等自身のものになり切っているとも云える。そしてわづかに人口の一割に満たない少数民族の中に本来の多様な民族音楽を見ることが出来るだけである。このことはイベリア人達の征服したラテンアメリカ諸国についても同様の関係がなり立つ。例えばブラジルではアマゾン河の河口から2000キロも遡のぼったマナウス Manaus にはパリのオペラ座を真似し窓ガラス一枚に到る迄フランスから運んできたアマゾナス劇場 Teatro Amazonas が19世紀には出来ているし、フィリピン中部ビサヤ地方のパナイ島イロイロ市 Iloilo にはスペインの国外には殆ど知られていないサルスエラ Zarzuela⁷ が19世紀から20世紀にかけて上演され圧倒的な人気を博している。

又戦前から戦後にかけて多くのミュージシャンが来日し軽音楽界の主流をなしていただけではなく現在も東京の六本木や赤坂のクラブやショー関係には多くのフィリピン人の音楽家を見ることが出来る。彼等は他の東南アジア諸国に比べエンターティナー Entertainer としてのタレントが極めて優れていることは先日空路で同席した砂田前文相も認めて居られた。

このようなことは彼等の土俗的音楽の中心にも幾らかのつながりがあるかも知れないが現代のフィリピンは他の東南アジア一帯の同じ音楽理論をあてはめるのは適当でない気がする。しかしインドネシア系の音楽については囲りの国々と共通していると云って差支えないと思う。これらはタイ・ラオス・カンボジア・ビルマを含み打楽器が中心となっている。そしてマニラには1582年建立のキアボ教会 Quiapo, 1611年創立のサント・トーマス大学 St. Thomas 1621年建立のサン・セバスチャン教会 San Sebastian などがあり、マニラ郊外のラス・ピナス教会⁸ の22ストップ、714本にわたる竹製のパイプオルガンは毎日ミサを奏でているし、各島々の教会は17・8世紀までに造られ、中でもセブ島のサン・オーガスチン教会 San Augustin は1565年にレガスピによって建てられたバジリカ風の教会である。

キリシ教化され何百年も経った地域では祝祭日の行事の殆どがカトリックのフィエスタからきている。全国的なクリスマスの行事から聖週間・復活祭に到る数々の祭りはかつてのスペイン本国での興奮を思わせるものもあるが、極めて地方的色彩が豊かになってくる。そこには南米諸国でかつてスペインが行った布教が極めて土俗的色彩をもって吸収されていったのと同

様な一種独特なカラーが出る許りでなく1902年以來のアメリカの占領によってもたらされた再殖民地化はローマ教皇庁の教会民族化の方向を根本的にくつがえしてしまい可成り混乱してしまったのではないと思う。又一方アメリカは南部のスルタンやイスラム法を無視し、それによって憤りをもって反乱に加わったイスラム教徒をアメリカ・インディアン平定と同じく皆殺し作戦でのぞみあくまでも軍事力で平定、フィリピン人にアメリカ社会の価値観を教えこみ、彼等本来の土俗的文化に対する蔑視を生み出してしまった。これは今日可成り地方の部落まで入りこんでも必ず小学校はあるが、三代前位から正確に彼等の伝統的な行事を再現することが大変難かしい状態にあることを見てもよくわかる。

これらの一部は基督教の祭礼に見られる他、極めて近代的にショー化されてしまって各観光地などで精力的に上演されている。

黒沢隆朝氏によるとフィリピンは東南アジアではもっとも古くからヨーロッパ音楽を素直に受けて、彼等の伝統音楽をまったく忘却したサンプルの一つといえることができる。〔東南アジアの音楽 音楽の友社〕そしてラメンタシオン Lamentacion, ダンサ Dansa, パンダンゴ Pandanggo のようにスペイン風のセレナードやダンス、或はボレロのリズムを持った多くの民衆の音楽が流行している一方基督教に帰依しなかったモロ族、イゴロット族、イフガオ族、カリंगा族の四種族はスペイン文化と同調しないでフィリピン古来の民族音楽や民族の伝統的生活の中に生きているのである。

第四章

フィリピンの四部族の民族音楽の調査 (Musical research of the Cultural minorities in Philippine)

前章で述べたノンクリスチャンの中の四部族を調査する方法を考えた時に南部のミンダナオ島一帯に居るモロ族を除いて他の部族は殆どルソン島北部の山岳地帯に居住している。しかしこの地方はマニラの北方約250キロ、標高1500メートルのバギオ Baguio を基地として西海岸一帯および東側の平野部には一周する道路が出来たが、500キロ以上の道に囲まれた高地はごく一部をのぞいてはジープでも入れないようなところがある。比較的楽に行けるために最近観光地として脚光を浴びてきたボントク Bontoc やバナウエ Banaue に行くのも軽飛行機かヘリコプターで近くの空港に降りるかバギオからバスで8～9時間かけて入らなければならない。しかも距離にしては僅か90キロ位の所なのである。

現在のフィリピンは各種の調査にあたっては殆ど制限がないといっても良い位であり、研究者にとってはニューギニアやオーストラリア北部を調査するのと違って大変容易である。しかし今回はネグリートやタサデイを研究するためには3・40人の探検隊を組まねばならず、これは不可能であり又渡航費から滞在・調査費のすべてを個人の負担で出来る範囲に限定せざるを得なかった。それにもかかわらずこのような計画を立てた理由は西欧諸国と東洋文化の接点を調査するというような大義名分ではなく、数年前に訪れた南米各地でふれた最盛期のスペイン文化が殖民地政策によってどのように原住民の文化とかかわり合ってきたかということだけで

あり、そのサンプルの一つとして日本から簡単に往復出来又費用もあまりかからないフィリピンを選んだにすぎない。しかし民族音楽、或いは民族学に於てもこの地域の研究者の数が最も少なく又資料も不備であるのできわめてプリミティブな事柄からも研究の対象としての価値を認められることも理由の一つである。

私は1960年に一度マニラに立寄ったことがあるが次に訪れたのは1976年にインドネシアに出かけた行きと帰りである。現在でもフィリピン大使館や観光局でも民族音楽の資料は皆無に近くフィリピン航空では国内線の正確な時刻表のパンフレットもない状態である。

調査方法は大学の休業期間を利用して数回にわけて訪比することにし78年8月、79年3～4月、7～8月、12月から80年1月にかけて今迄に4回、約40日間、調査地域はミンダナオ島サンボアング、同じくダバオ、セブ島セブ市近辺、ルソン島南部レガスピ一帯及北部バギオとその北側の地域である。なお調査にあたりフィリピン国立大学音楽学部⁹、レガスピ芸術科学大学及観光局の教授や担当者に会いアドバイスを受けた。その他セブ市のサンカルロス大学博物館¹⁰やレガスピのカマリグ・カソリック教会¹¹が保管している先史時代の数々の遺跡発掘品など、或はミンダナオ島パナソンカのムスレムの楽器や民芸品の個人コレクションなど見学するチャンスがあった。

何れの団体も財政が充分でなくフィリピン大学の図書館や研究機関にはもっともっと海外からの資金を導入すべきであると同時に研究者の交流の実現を計るべきであると聞かされた。折角発掘された貴重な先史時代の遺物も研究者は居らず目録は完備されないままで何十年も放っておかれ荒れるがままにされているなど大変憂うべき姿であった。その他マニラやその郊外、又中部ルソン島でスペインを始め数々の西洋の影響を受けた現代のフィリピンの音楽に触れたが南米におけるイベリア文化の影響の消化の仕方と多くの共通面があることに改めて興味を持った次第である。

第五章

ルソン島山岳部族の民族楽器 (Musical instruments of the North part of Luzon)

先ずスペインとのかかわり合いの起る以前の原住民の生活を調べなくてはならない。前記の3部族を短時日に調査することは仲々大変であり、私がバギオ滞在中はたまたま雨期で大型の台風が天の真上にどっかりと坐りこんで毎日殆ど動こうともしない。マニラを発つ時予約した航空便は毎日全便が欠航となったため、現地の人達が利用するバスで豪雨の中をバギオに着いた。翌日は山岳部のバナウエに入るつもりであったが雨のため道路は不通となり開通の見込みはないという連絡である。

マルコス大統領出身地方の最北端のアパヤオ族 Apayao I-1. は最近ようやく開けてきたが、そこから南に入ったカリング地方までは殆ど交通の手段がないようである。カリング族 Kalinga I-2. は人口47,000で言語はカリング語。昔から槍や斧で狩猟をして暮らして居り犬を使って野生のブタや鹿を追っている。言語の違いをのぞけばすぐ南のボントク・イゴロット族 Bontoc Igorot I-3. 人口32,500言語ボントク語とほぼ同様な大きな集団の部族であ

る。ポントク達は東の山脈の蜜林から西にかけての不毛の平原に住み、或る程度の石の段畠を作り、水稻栽培を行い、独特な容貌と密集部落を作っている。アト Ato とオログ Olog という制度があり、アトは男子寮で男達はここで勇敢に戦った話や自分の生きた時代の知識を若者達に教える。オログは結婚適齢期の若い娘達だけの宿舎である。

ポントクの南はイフガオ族 Ifgao I-4. で人口80,000言語はイフガオ語であり、世界の七不思議の一つといわれる天にもとどく許りの棚田 Rice terrace (fig 1.) を山脈の斜面に3,000年来作っている。彼らは8~10戸に分散した小さな集落を作り (fig 2.) ごく最近まで首狩り族の一つとして有名である。以上の3部族ともキリスト教文明との接触が殆どなく霊媒や無数の神々を信じた独特の祭礼形式を今なお守っている。

翌日はバギオからポントク經由バナウエへの道路は不通なので東の山脈沿いに行くことに決め馬力の強いアメリカ製の大型車をチャーターした。イバロイ族 Ibaloi I-6. の部落からイロンゴット族 Ilongot I-9. の地帯を通過しイフガオに入るため左側の山岳地域に登っていった。道路は可成り荒れているが川のように流れている水で洗われた路肩を気にしながらバギオを出発して約9時間かかって目的地バナウエに着いた。運転手の説明だと約270キロの走行で普段なら6時間半位で到着出来るとのことである。

たった一軒あるホテルには同じようなコースをたどってきたアメリカ人のグループで一杯で部屋がなく、雨の中をポントクまで走るか近くのユースホステルしかない。そこで私はとりあえずユースホステルに荷物を預け早速バナウエの部落に出かけた。斜面には何軒かの点在する部落が途中見えたが暗くてよくわからない。何ヶ所かある店もろうそくの光とランプだけである。しかしホテルに10人以上の宿泊客が居る場合民族ダンスが行われることがわかったので今夜独自に部落の人達を頼む必要がなくなり引返した。

ホテルにはさすが自家発電の設備があり、ここで演じられた民族の踊りは全く素朴な日常生活そのままであり、踊り手も唄も決して上手いとは云えないがあまり筋のない祭礼の行事の幾つかを再現してくれた。楽器らしいものは殆ど使われない。わずかにカルタン Kalutang と呼ばれる長短二本の柏子木とやかましい銅製のガンサ Gansa と云うドラだけである。立派な濃紺のレパントクロス Lepantcloth に斜縞の模様の入った腰衣と白いブラウスだけの女子の踊り手の顔には唄いながらも全く表情がよみとれない。男子は赤い褌に房のついた前飾りをただりだけの裸形である。出陣式から他部族との戦いの様子・負傷者や首狩りのやり方、そして凱旋の儀式、又色々な神に供える豚やいのししをいけにえにする有様などを再現して見せる。

(fig 3.) 1000種類にもものぼる様々な神への儀式では色々な祭礼の形と使用される楽器にもバラエティがあるに違いないと考え、翌日は部落に出かけそこで見たものは大体次のようなものである。

体鳴楽器 (1)或は(2)に属するのはカルタン (Kalutang (fig 4.) 長短二本の柏子木である。色は黒くタン tan-ag という堅木が使われ、小さいものは40センチ位から大きいものは60センチ以上と色々あるが普通二本を一組として使うか、或いは一本の時はまん中の取っ手を持って左右を別の小棒片でたたき二つの違った音程を出す。形は衣紋かけに似て厚さは3センチ位で

ある。カルタンは Ka-lut (分れる) という意味もあるが可成りはなれたビサヤ族 Visaya III でも使われているというがその場合タガログ語でマリンドウケ Marindugue という。他の東南アジア諸国ではこの系統のものはあまり使われていないようである。

(5)のブンカカ Bunkaka 或はビルビル Bilbil (fig 5.) は竹を割って二本の舌状に作り、根本にすじを入れる。これを手のひらに強く打ちつけビューンという音を出す。呪術の時も使われるが草原を歩く時蛇などを防ぐためである。にぎり方で音色が変わる。小さいのは30センチから70センチ位までである。これはむしろイゴロットで使われることが多い。

(1)のバンギワイ Bangiwai 二本の棒に近い板木(ばんぎ)で大小がありイフガオ以外でもよく使われる。

(3)又は(4)のガンサ Gansa (fig 6.) これはイフガオとアバヤオ族が使う直径30センチ位の手提げのゴングでありこぶなしの盆状である。大型のものはマカトウバ Makaupag, 小型のものはカロス Calos と呼ばれる。

その他に(7)のアピユ Aphiu といわれる口琴があるはずだが、これにはお目にかかれなかった。

気鳴楽器 (2)によるものではカラレン Kalaleng (fig 7.) と呼ばれるポントクよりすぐ北西のティンギャン族 Tinguian I—7. の鼻笛があり、独特のおもて三穴、うら一穴でまわりに平らな切りこみがある。ここでは可成り長いものもあり6~70センチ位のものもある。ポントク・イゴロット用なのは平らな切りこみがなく丸い筒であり、イピップ Ipipe とよばれるが pipe という発音から笛類すべてを指し鼻笛はケレレンという。〔黒沢隆朝著 東南アジアの音楽 音楽の友社〕一番北のアバヤオ族はこの笛をバリンギン Balinging 或はバリィン Baliing と呼んでいる。これらの鼻笛はフィリピンの他の地方ではあまりお目にかからないがポリネシアのサモア島で使われている鼻笛は閉管四穴で竹の一ふしが極めて短かく又フィリピンの鼻笛の3倍以上の太さがある。イフガオにはウンギン Unguing という縦笛、ティンギャンにはディウディウアス Diwdiw-as という5~7本のパンの笛があるということだが今回は見る事が出来なかった。

弦鳴楽器 (3)に属するパシン Pas-ing (fig 8.) は竹筒琴といわれる。一ふしの竹の筒の表皮を胴から彫り起し、それを弦として何本か作り指ではじく。この楽器についてはアバヤオ・イゴロットだけではなくミンダナオ島のバゴボ族 Bagobo V—7. やアタ族 Ata V—6. のものも有名でありそこではクグロン Kuglong と呼ばれている。竹筒琴はフィリピンの他の地方でも沢山見られるばかりでなく、ボルネオからインドネシアにも多い。マレーやマラッカではジャクン族の六弦の竹皮琴がこれにあたり、他に植物の葉をよった線や絹糸をはったものなど総称してカチャッピ Katjapi といわれる。

(2)に属する竹筒に弦をはり弓で奏くポントク・ヴァイオリン Bontoc Violin は今回見られなかったがザンパンス州のネグリート・ヴァイオリン Negrito Violin やネグリーートのタパス族のリットグィット Litguit など色々あるが中にはヴァイオリンを模したものもあり、どれが民族伝来の楽器だかよくわからない。又前述のカチャッピのような名前はインドネシアでは棒琴

或は琵琶系の楽器を指す時に使われ呼び名と楽器が地方によって可成り混乱していることも考えなければならない。

(4)のグリーンバオ Gurimbaw (fig 9.) をアパヤオ族が使っているが1メートル位でヤシの殻のクヒタン Kuhitan が共鳴のたみつけられている。ところがこれと全く同じものを遠くはなれた南米のブラジルでビリンバウ Bilimbaw として使われているのを何う考えたら良いのだろう。しかしブラジルではカンス Caxis という小さなガラガラを片手に穴あき銭で弦をたたくとい演奏法である。

膜鳴楽器 イフガオの部落で最初に見た太鼓はルダー Ludag (fig 10.) であるかがアパヤオも使っている片面長太鼓である。ルダーはピサヤ語の「横たえる」で膝の上のにせ手で打つとあるが私が調べた中には1メートル前後の一組のものもあり、これは立ててラテンアメリカのコンガと同様の演奏をする。

ミンダナオ島のバシラーン Basilan ではこれをアゴン・ボア Agon bowa と呼ぶ。

スリバオ Sulibaw (fig 11.) はイバロイ・イゴロット族の太鼓で50センチ位の高さ。このように人面を彫ったものもある。

以上の楽器類について可成りの数の計測と材質の分析が必要であるが何れも相当の違いがあり音響学的にも基準の固定が出来にくい。

バナウエはマニラから直線距離で348キロあり、1200メートルの高地なので雨期をのぞいて大変しのぎやすい。この辺一帯のイフガオ族は23,000人ともいわれスペインの占領軍がやってくるまでは彼等の行政機関をもち、バナボール Banawol と云った。これはここに住むフクロウのことである。イフガオはプゴー Pugo からきた言葉で丘や山腹のことである。近隣のボントクとカリングスとは基本的に同じ部族でこれらを総称してイゴロット Igorots と呼ばれている。これは又山岳地帯の首狩り族のことである。

現在では平和に暮らしているが過去に於ては外部の支配に抵抗する好戦的部族である。3000年来の棚田による農耕文化を持ちその長さはこのせまい谷間に何と22,000キロに及び有名な中国の万里の長城よりも長いと云われている。

翌日は少し天候の快復してきた束の間にボントク部落の方に出かけた。しかし道は到る所の崖くづれと水の流れている深いみぞによって寸断され、さすがの130馬力のポンティアックもぬかるみの中で右や左に方向をとられローギヤーでタイヤを空廻りさせながらボートのように進んでゆく。5キロほどの道のりを約40分以上かかった。何ヶ所かの部落に立寄り槍を持った踊り手や戦いやり方を写真に撮る。(fig 12.)

バギオまで引返した時たまたま日本の遺骨収集のグループに合い反対方向よりボントクとバナウエに入ったがジープでも途中降りてひぎまで泥につかりながら山道で車を押してゆく大変困難な行進であったことを知った。そう云えば何ヶ所かの部落民が日本軍のものだと云って穴のあいた鉄かぶとや赤くさびた銃剣などを売りに来たり、もっとすごい話も聞かされた。

バギオでは都市に出てきたこれら三部族が彼等の民族芸能などを紹介したり、ショーなど行っていたが民族の踊りはフィリピン各地からポリネシアまでふくむ可成り混乱した内容である。

Fig. 1 バナウエのライステラスは万里の長城より長く世界の七不思議の一つである
(筆者撮影)

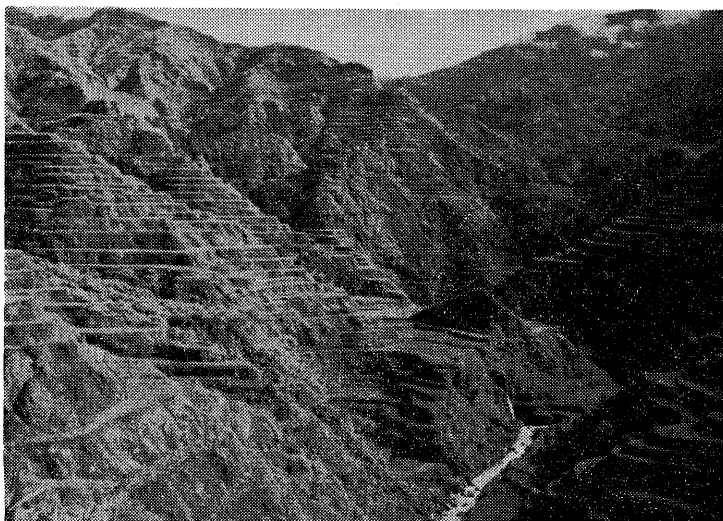


Fig. 2 イゴロット族は8～10戸の分散した高床式の家で部落を作って住む(筆者撮影)



Fig. 3 レパントクロスを身につけたイフガオ族の踊り(筆者撮影)



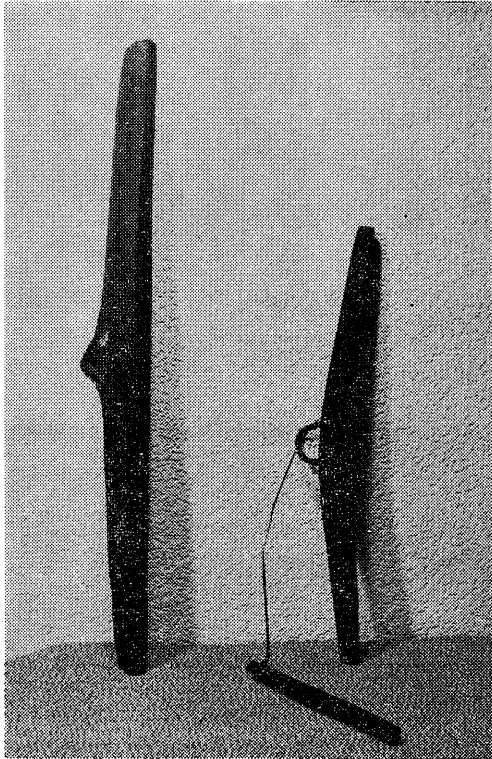


Fig. 4 ハンガーのような楽器カルタン(筆者撮影)

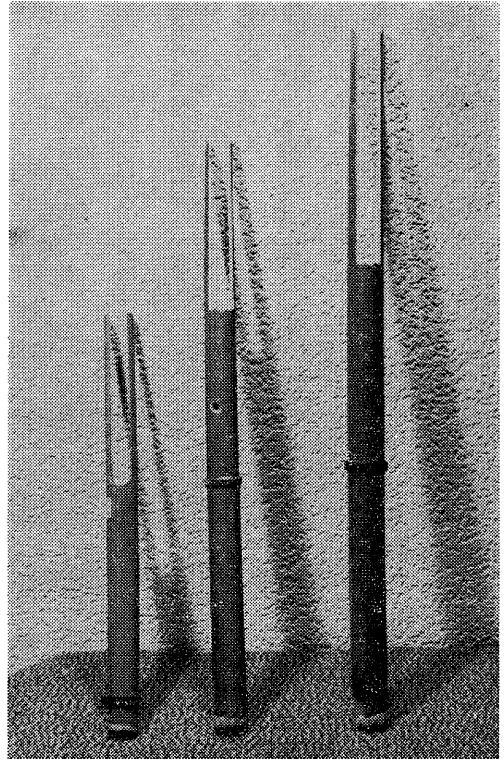


Fig. 5 ブンカカ或はビルビルは呪術の時だけでなく、草原を歩く時蛇などを追いはらうために使う(筆者撮影)

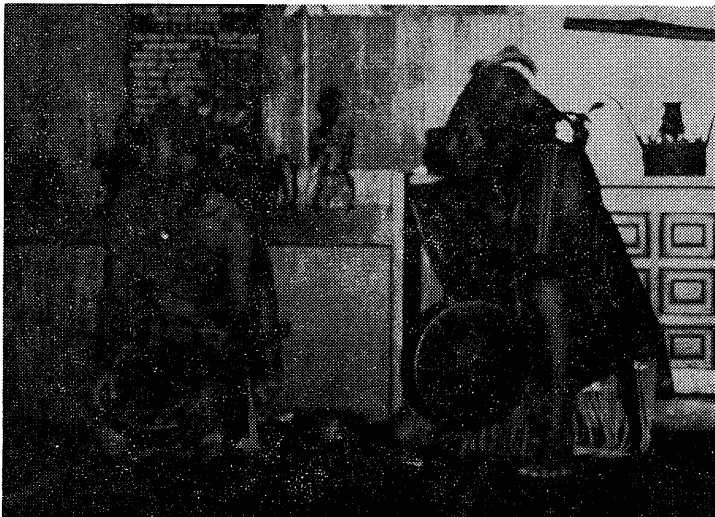


Fig. 6 ガンサはこぶなしの
ゴングでイフガオと
アバヤオが使う
(筆者撮影)

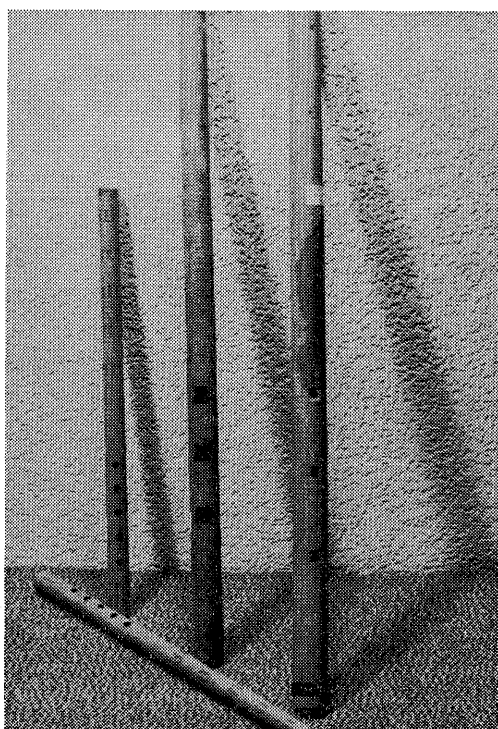


Fig. 7 イフガオの縦笛ウンギン（左2本）とイゴロットの鼻笛（右2本）（筆者撮影）

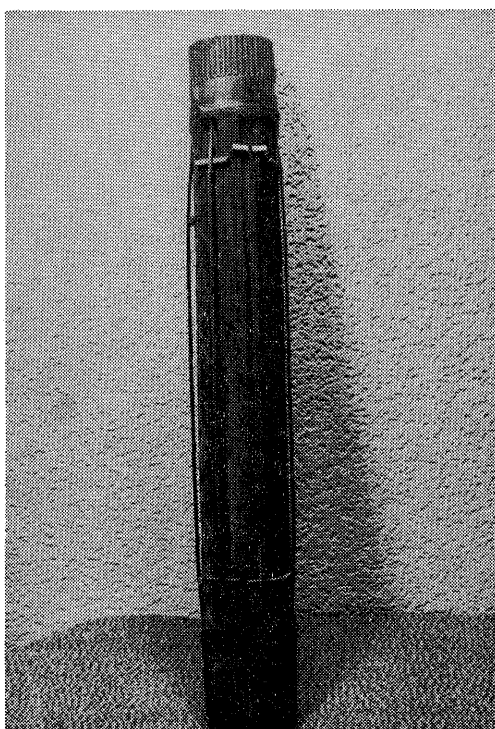


Fig. 8 竹筒琴これはミンダナオ島バゴボ族のもの（筆者撮影）

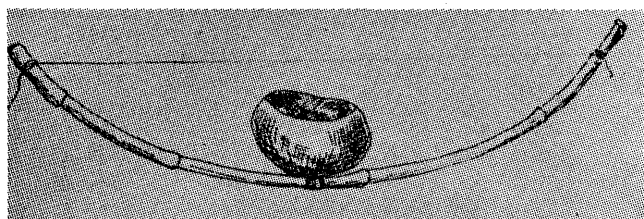


Fig. 9 アバヤオのグリンバオ。しかしこれと同じものが南米ブラジルにもある（東南アジアの音楽P519音楽の友社より）

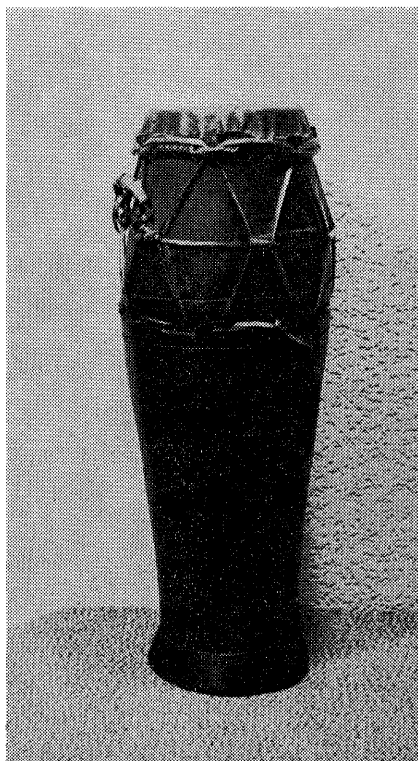


Fig. 10 ルダーの鼓面のはり方が面白い（筆者撮影）

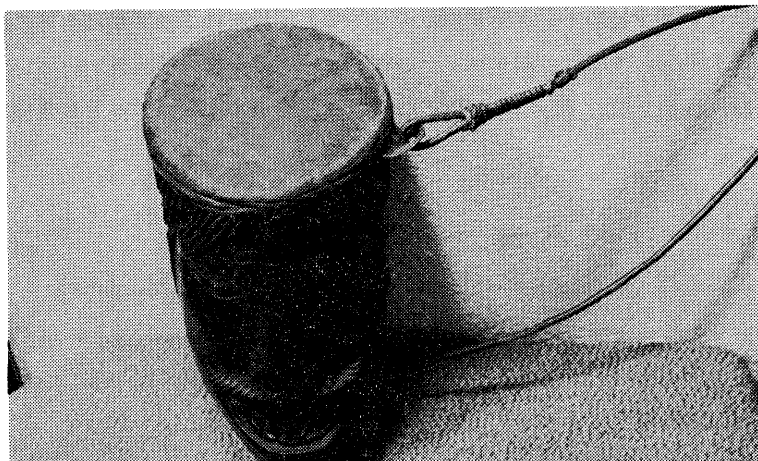
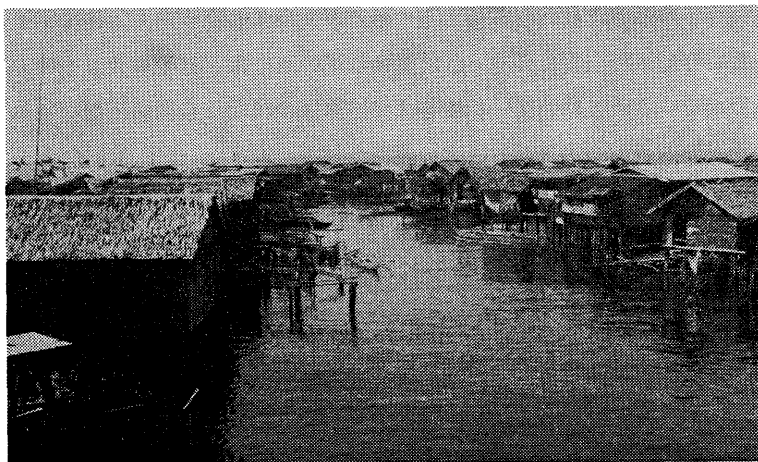


Fig. 11 人面を彫ったイバロイのスリバオ
(筆者撮影)



Fig. 12 槍と薙刀で身を固めたイゴロット
(首狩り族)の正装(筆者撮影)

Fig. 13 リオ・ホンドのモロ族の海上部落
(筆者撮影)



そこで使われていた楽器はゴングを始めミンダナオのボナン、そして大小のドラム類はもとの呼び名を忘れられ、トーレ Toere と呼ばれるポリネシアのウッドブロックまで使われていていささかびっくりすると同時に現代文明と手を結んだ民族芸能の急速な衰退を目のあたり見る思いであった。

第六章

ミンダナオ島のモロ族の民族楽器 (Musical instruments of the Muslims in Mindanao)

ミンダナオ島西部、パラワン島、スルー諸島に集中しているモロ族 Moros は15世紀には殆どイスラム教に改宗してしまい近隣のインドネシアなどと共にイスラム文化圏に属する。つまり最近迄可成り色々な角度から研究されているインドネシア音楽にその原流はぴったりと一致している。その中には僅かに地方的特色が認められるが今回はミンダナオ島最西南端部のサンボアング Zamboanga 及其の付近、リオ・ホンド Rio Hondo, タルクサンガイ Taluksangay, それにサンタ・マリア Santa Maria, パソナンカ Pasonanca などの村及サンタ・クルス島 Sta Crnz を訪れた。ダバオ Davao では対岸のサマル島 Samal のサンホセ San Jose のイスラム村を訪ねたがワンガンカリナン Wangan Calinan のバゴボ村 Bagobo Community には時間がなく立寄れなかった。

サンボアングはスルー・ボルネオを經由しインドネシア迄カラフルな帆をはったビンタ船 Vintas が行き来しバーター貿易の市が立つ活気のある町だが市の中心はセブからの植民者で集辺部の村々は昔ながらのモロの部落と云う風に分けられる。赤道に近い強烈な日差しのもとではすべての物が鮮やかにきわだって見え無数の珊瑚や巨大な貝類・そして眩しい位の誰一人いない白い砂浜と、底の底迄見える熱帯のエメラルド色の海によって、もはや文明世界とは全く隔絶されている感じがする。

海岸に住むモロ達は昔からの習慣に従って岸から遠くはなれた海上に高床式の抗上部落を形成する。(fig 13.) この様な生活は先史時代のヨーロッパや南米のアンデス山中、チチカカ湖におけるインデオ達の住居にも見出すことが出来る。

リオ・ホンドやタルクサンガイの部落に見られるモロ達の殆どがV-Eのサマル人達である。他部落の襲撃を撃退する為に今でも海上高く設けられた見張り塔の上には一日中複数以上の若者達が自動小銃を片手に警戒をゆるめてはいない。彼等は勿論軍隊ではなく自衛組織なのである。タルクサンガイでは一人の若者が私の希望と目的を聞いて村中の家々を一軒一軒訪ね廻り何か古い楽器が残されていないかと聞いてくれた。ある女性の家に昔から伝わる楽器があることがわかり海の上につけられた巾20センチほどのぐらぐらした細い板の道をわたり海上の家に行った。

ほこりだらけになった何個かの鉄のかたまりを並べてみるとクリンタンガン Kulintangan (fig 14.) と云われるゴングのセットである。これは体鳴楽器の(2)に属し壺形ゴングであり東南アジアではタイからインドネシアに到る迄大変良く使われるものの一つである。素材は鉄で数は五個、祖父の代より前から伝わると云って100年以上前のものだろうと云うことであった。

もう演奏法はこの村では忘れられ音列の順に並べて叩いてみたが亀裂が生じた一個以外は一応不たしかな音程ながら鳴るようであった。現在使われている真鍮のものはもっと深く音も良いが殆どインドネシアのものである。(fig 15.)

マライではチュランポン Chelempong と云い6コが台の上に乘せられる。ビルマではチャー・ワイン Kyi wain と云い環状の枠の中に21コの壺形ゴングを並べる。

タイのゴングはコォン(グ) Khong と発音し吊して使用するが多いがコォン・ウォン・ヤイ Khong wong yai のように16この大型壺形ゴングを演奏者のまわりに並べるのやコォン・ウォン・レ Khong wong lek のようにオクターブ高いもっと小型なものを18コ並べる方法もある。

カンボジアではゴングは8世紀にジャワに征服されて以来使われたがタイやカンボジアのゴングはあまり一定の調律はないようである。

インドネシアではゴングは旋律楽器として使われ種類も他の地域にくらべ極めて多い。フィリピンのクリンタンガンは或る程度の旋律音高を持っている点ではまさにインドネシアのゴングと同じものである。

(2)に属するガバーン Gabang (fig 16.) は竹又は木片を8~16コ並べた木琴でありばちは木又はそれに皮を張ったものを用いる。

インドネシアではガンバン・カユ Ganbang Kaju と云いカユは木質のことである。

これを見つけたのはサンボアングのマーケットだったがここにはボルネオのサバ州との間に横たわるスルー諸島の部族の一つが持ちこんだものであり①②③④の何れかである。

そしてこれは遠くはなれた南米各地ではマリンバ Marimba およびバラフォン Barafon として同様なものを見ることが出来る。

これらはマダカスカルからアフリカ大陸に渡り、さらに中南米に伝えられたものでそれが再びヨーロッパに於て現代の音楽にしばしば使われるようになったと見るのが正しいと思う。タイのラナート Ranat, マライのドリドリ doli-doli なども同じものであり竹の他に檳榔, ラワン, チークなどを用いる。

ガンバン, ガンサ Ganbang gansa 或はグンデル gendel (fig 17) サロン Saron のように青銅鍵を使ったものにはお目にかからなかったが過去に於てガムラン音楽 Gamelan¹² がそのままの形でフィリピンにもたらされたかどうかは今のところわからない。

(7)の口琴にあたるものではミンダナオのパゴボ族ではコンペン Konpeng と呼ばれるがビサヤ族のスウビン Subing 或いはカラトン Karatong の方が通りがよい。前述のイゴロット族はアピュと云ったがタガログ族のバリンバウ barimbaw—と云う呼び名がヨーロッパには口琴の名として伝わりやはり前述の bilimbaw—と全くまぎらわしい名前となってしまった。

気鳴楽器では(2)にあたるスビン Subingはスバノス族V—3. のものでビサヤ地方のラントイ Lantoy とよばれる長さ4・50センチのノッチをもった縦笛と同じである。

その他にスルー諸島ではサフナイ Sahunay, ダパオのパラドンギャンガン Paladonggiangan などがある。



Fig. 14 タルクサンガイで見つけた古いクリンタンガン (筆者撮影)

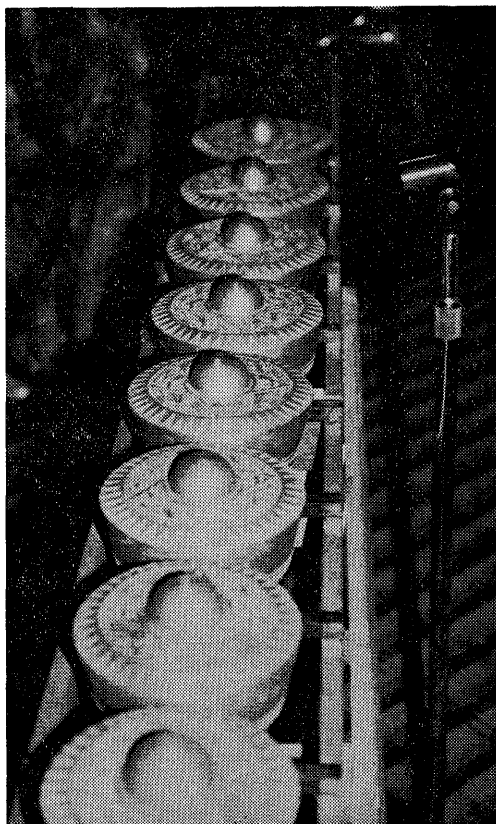


Fig. 15 現代のクリンタンガンはフィリピンやモロ達の踊りになくてはならない楽器だ (筆者撮影)

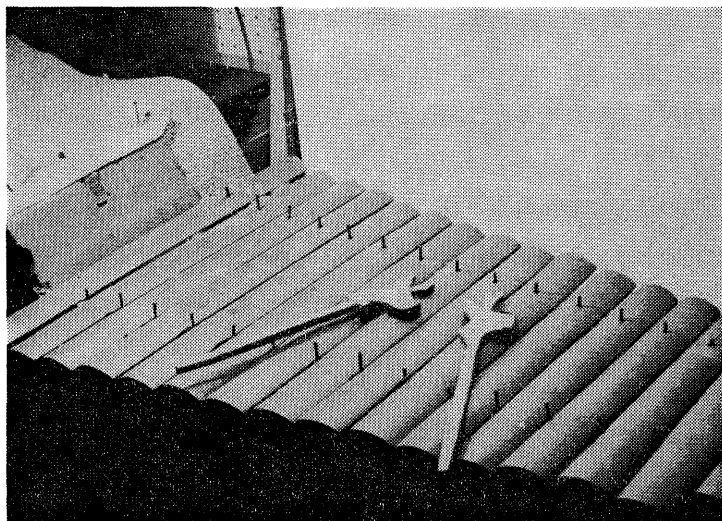


Fig. 16 16本の木片を使用したガバーン。サンボアンガの市場で見つけた (筆者撮影)

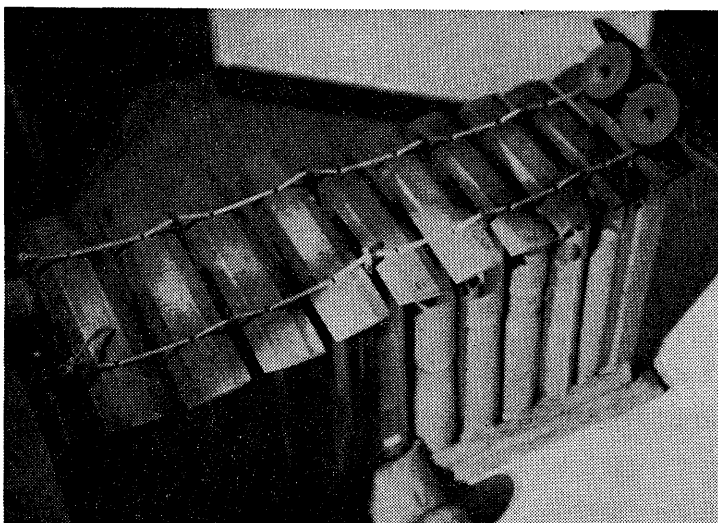


Fig. 17 ゲンデルはインドネシアで多く見られる
(筆者撮影)

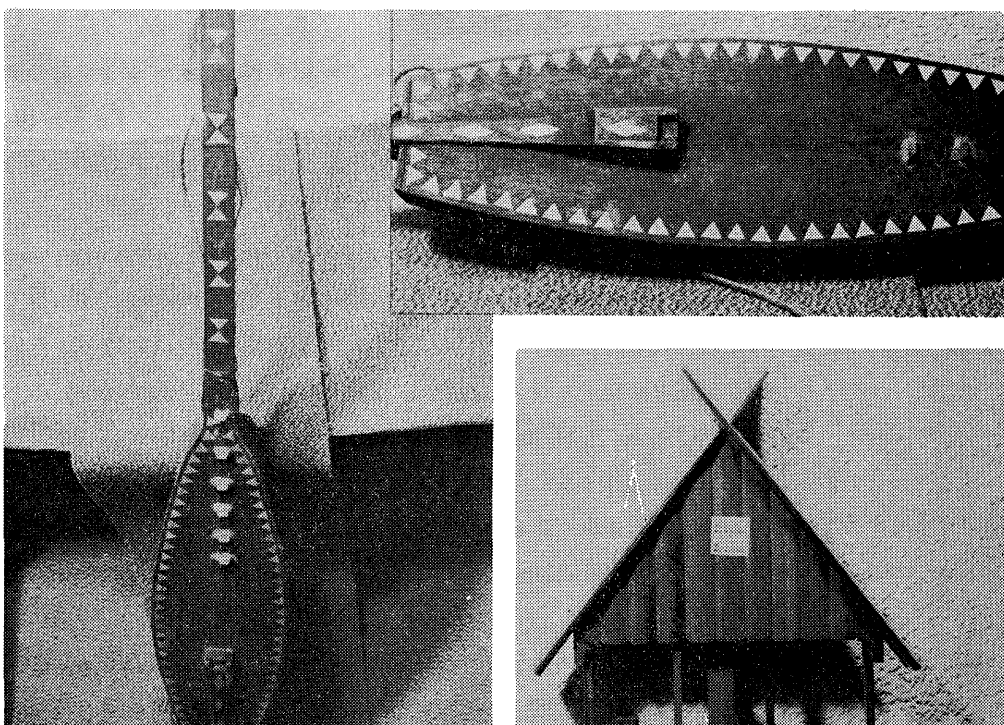


Fig. 18,19 クジャッピーと呼ばれる舟形ギターは
東南アジアのいたる所にある
(筆者撮影)

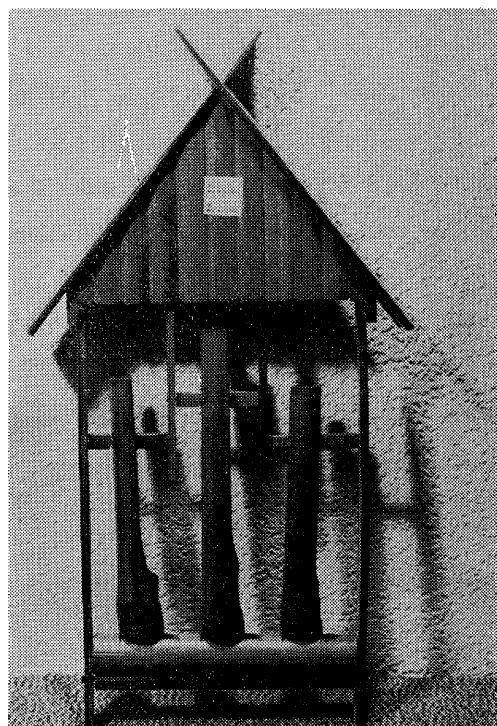


Fig. 20 アンクルンは竹が奏でる鈴のようにさ
わやかな音がする。1人1人が1つの
音名になって合奏するのは楽しい
(筆者撮影)

弦鳴楽器では前述のパスィンと同じ竹筒琴のクグロン Kuglong がインドネシアや東南アジアの到るところにある。

(2)にあたる舟形ギター類として一般にバゴボギター Bagobo Guitar とよばれるものはクジャッピー Kudyapi (fig 18.) (fig 19.) ティルライ族V—10. のケチャッピー Ketyaphi などであるが二弦のものが多く。これは又近隣諸国でも大変良く似た構造と呼び名で数多く使われているが何処にその原形を求めたら良いのか全くわからない。インドネシアではルバープ rebab あるいはチュランブン tjelempōeng があり何れもアラビア渡来の弓奏弦楽器だがガムランでは殆ど重要視されていない。

しかしフィリピンのクジャッピーに最も近いものはスマトラのバタック族が使っているリュート型弦楽器のハプタン hapetan 又はアソプー asopi であり二弦を爪びきする。

東部ボルネオにはやはりダヤーク族とカンラン族が二弦のリュート型弦楽器を使いジンバイ Djimbei と呼ばれている。北ボルネオのドスン族の二弦カサッピは胴が空洞でないしセレベスはカサッピの名で南のスンバ島まで見ることが出来る。

ミンダナオ南部の膜鳴楽器はコタバト地方 Cotabato のネグエット Neguet, バシラン島のアゴン・ボワ Agon bowa といわれる長太鼓位で両面鼓のトゥゴ Tugo はティルライ族V—10. で使われている。ジャワ系の楽器ではクンダン Kendang がある筈だがコリンタン（組ゴング）と一緒に演奏する時にはアゴンを使われるようである。（バゴボ族。）

W・P・マルムの『東洋民族の音楽 *Music Cultures of the Pacific, the near east, and Asia*』によるとフィリピン群島の南部の種族たちに大きな影響を与えているのはイスラム教である。この影響にさかのぼって15世紀以後のインドネシアにその源を見出すことになる。そしてここに、フィリピン群島南部とインドネシアとの間に、音楽的類似性があるのではないかという期待がおこってくる。（William P. Malm, 松前紀男他訳、東海大学出版会）

フィリピンのおかれた今日の現状はまさにキリスト教・イスラム教そして土俗宗教が混合して切りはなすことの出来ない多様性を吾々に示してくれる。そして乾いた竹がひびきわたる音色はパイプオルガンからアングルン Angklung (fig 20.)¹³ に到るまで訪れる人の気持をあたたく包んでくれる。

有史以前の石器時代から現代の最先端の生活までがこの一定の地域に何のかかわりありもなしに共存してゆくことが出来ることは全く信じられないことだが、道一つないジャングルの山中に時々煙りがあがるのを見る時彼等の生活のすべてがそこにあることを私は知り、複雑で感動的な体験にひたってしまうのである。

おわり

註

1. 匏はふくべを用いた楽器で笙などをさす。
2. サンギータ・ラトナーカラ（古典的理論書）第6巻に示される。
ガーナ gahana（金属打楽器）、スシラ sushira または çushira（管または気楽器）、タタ tata（弦楽器）、アバナダ avanaddha（皮を張った打楽器）
3. マイヨンは動物学や生物学における分類にならって、綱 (class)、目 (branche)、属 (section)、亜属 (sous-section) の用語を導入した。又ザックスはデューイの10進法を応用した。又フランスのシェフネール André Schaeffner やドニントン Robert Donington の研究などがある。
4. たとえば 1 1 1 ・ 2 4 2 ・ 2 2 2 ・ は最初の3ケタが体鳴楽器であり直接に打奏されることを示し、次の3ケタと最後の3ケタでそれがベルであることを示す。
5. マジェラン (1480～1521) はポルトガルの探險家、航海家として地球を最初に一周した探險隊の隊長としてマジェラン海峡を発見、又太平洋の命名をした。西洋人として始めてフィリピンに上陸、マクタン島で酋長ラブラブによって殺された。
6. ネグリート Negrito はルソン島東部及西部の山岳地帯、パナイ島、ネグロス島の奥地、ミンダナオ島北東部、パラワン島北造などの密林に住む孤立したピグミー系部族で、人口数千と云われている。
7. サルスエラはスペインの国民的歌劇で今日でも熱狂的に愛好されている。
マドリッド近郊の La Zarzuela 宮で17世紀以来上演されていたものである。捨白が入るのでドイツのジグシュピール或は喜歌劇にあたるが、内容は悲劇的なものもある。
8. マニラ南方12キロ、リサール州ラスピナス Las Piñas にあり1793年完成、製作者はレコクト会のカルメン師。714本のパイプのうち592本迄が竹を使っている。5オクターブ、22ストップ。
9. University of the Philippines マニラ北東のケソン市 Quezon にありUPと呼ばれる。1909年に創立したフィリピン最大のキャンパスであり、その面積は何と493ヘクタールある。ケソン市内だけで23を超える学部やカレッジがあり中心となるのは College of Arts and Sciences であり勿論 College of Music では native な Music research を行っている。
10. University of San Carlos 1591年創立のフィリピンでは最も古い大学であり付属博物館ではビサヤ、ミンダナオ、コタバト、ボホール島などの貴重な資料が多くセブを中心とした考古学の研究が1967年来行われている。参考文献 An Archaeological picture of a pre-spanish Cebuano Community by karl Hutterer 1973年サンカルロス大学発行。
11. Camalig Catholic Chunoh. カマリグ市から北に12キロのホヨップ・ホヨパン洞穴 Hoyop-Hoyopan Caves には中国の古器やマレーシアの古器、人骨などが発見され現在教会が保管をしている。
12. ガムランは金属打楽器を中心とした音楽でガムレ gamele またはガムリ gamli からきた言葉でガムレは道具を意味する。つまりガンバンとゴング系を主体とした合奏音楽でジャワ島に行われ他の東南アジア諸国にも影響を与えている。
13. アンクルンはインドネシアで有名な民族楽器だがタイでも使われている。フィリピンでは各人が1～2コのアンクルンを持ち、一個一音の楽器を交互に鳴らしながらメロディやトレモロを演奏する。

参考文献

- Cultural minorities of the Philippines, San Carlos Publications, 1975.
The Iloilo Zarzuela, Doreen G. Fernández, Ateneo de Manila University Press, 1978.
Region I. Ilocos norte, Abra, Ilocos sur, Mountain Province, Benguet, La Union and Pangasinan National Media Production Center Manila, 1977.
Welcome to Banaue, A. R. Bobadilla Philippine tourism Authority, 1973.

An Archaeological Picture of a Pre-spanish Cebuano Community, Karl Hutterer, University of San Carlos, 1973.

Our Heritage in Bikol Folksongs, Merito Espinas, Sarung Banggi Park committee, 1965.

Ths Agta of Palanan, Isabela L. Bennegen, Esso Silangan Volume XIV no. 3, 1969.

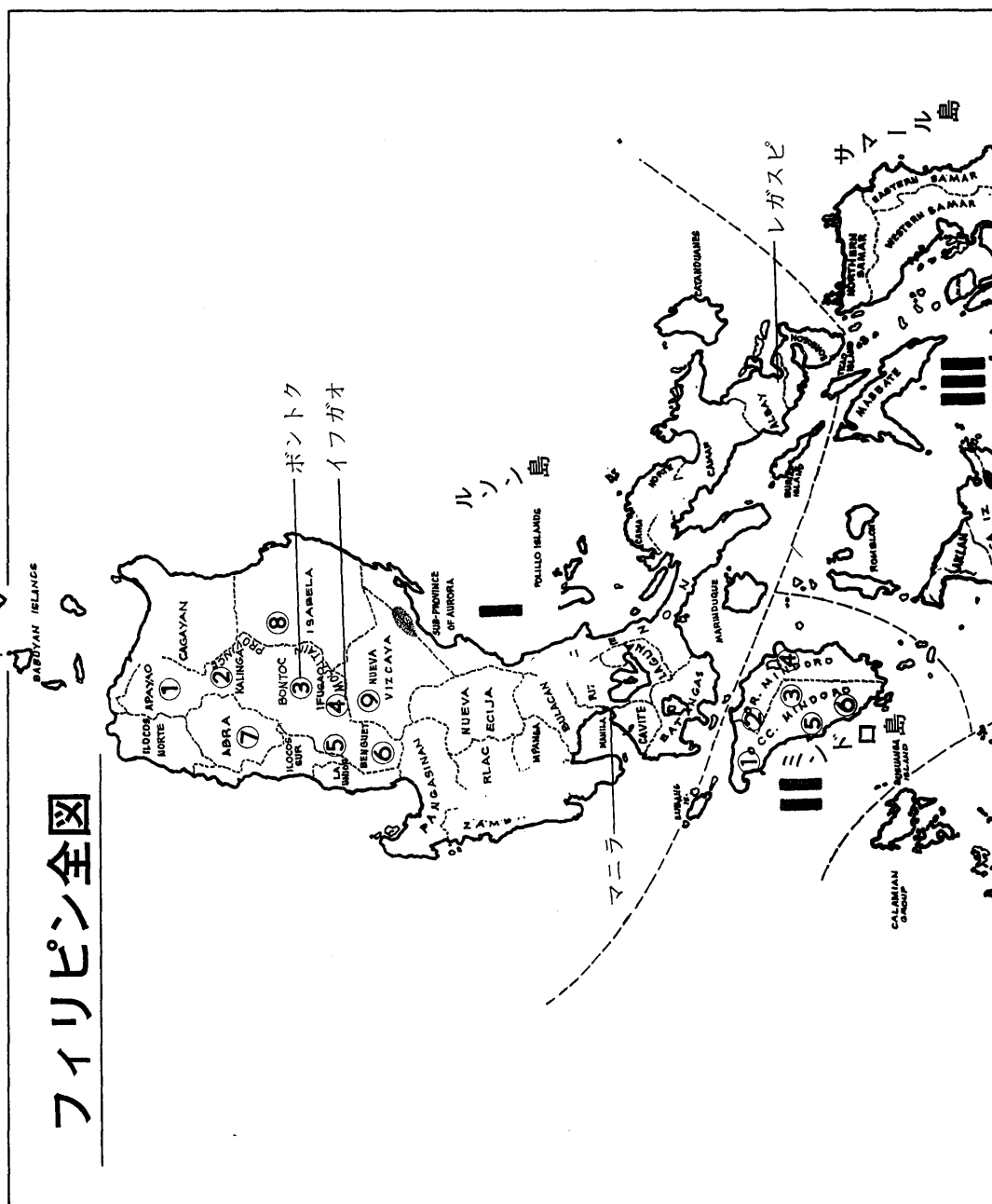
東南アジア現代史Ⅱ, 池端雪浦他著, 山川出版社. S52.

世界の民族, 東南アジア島嶼部, 平凡社, 1979.

東洋民族の音楽, マルム著, 松前紀男他訳, 東海大学出版会, S51.

アフロ・キューバ音楽に於ける打楽器の起源と発達, オルティス著, 見砂直照訳, 音楽の友社,

S54.



新樂器分類法，桜井哲男，国立民族博物館研究報告3—1，0000.

樂器目錄

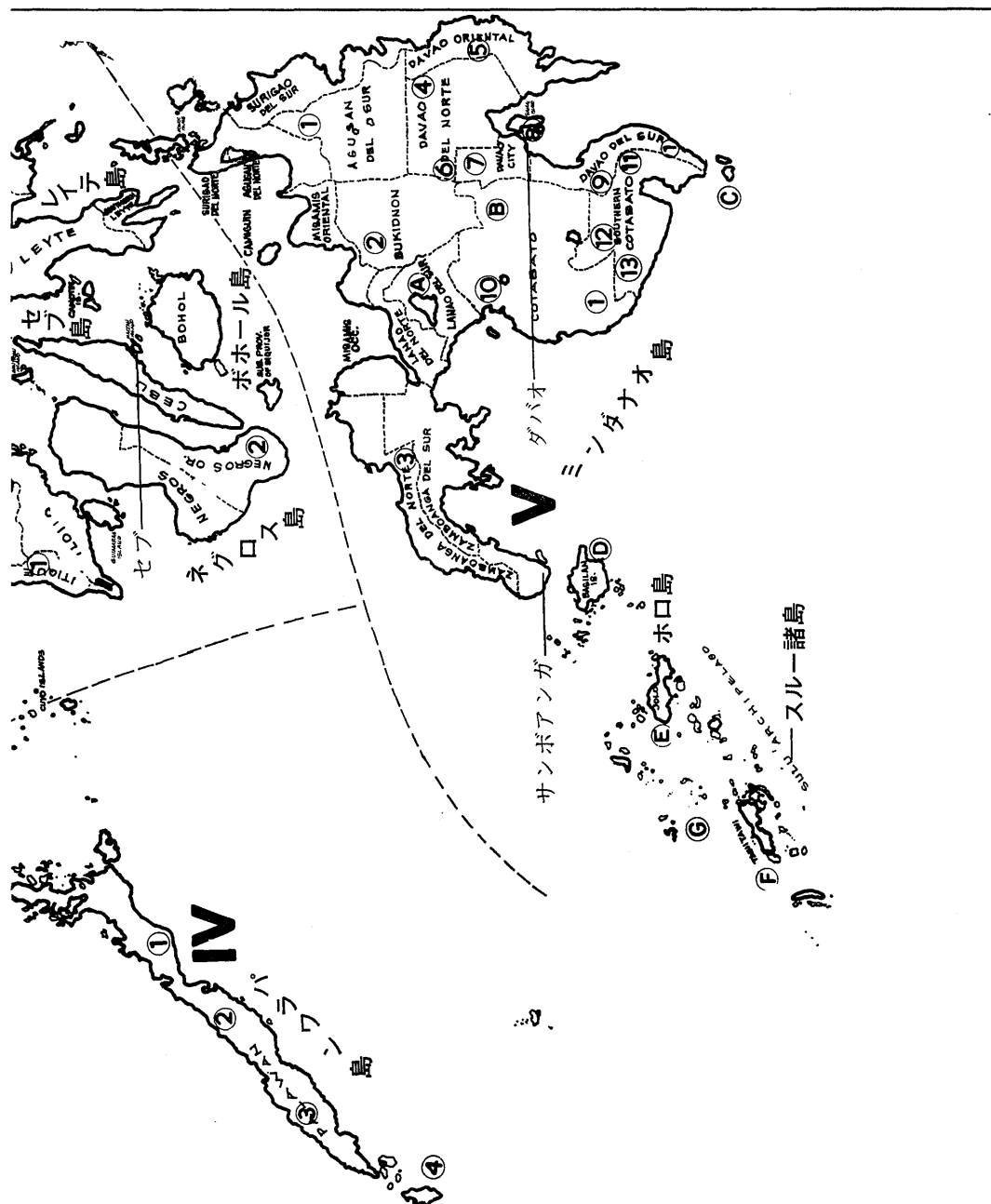
大阪音楽大学楽器博物館。

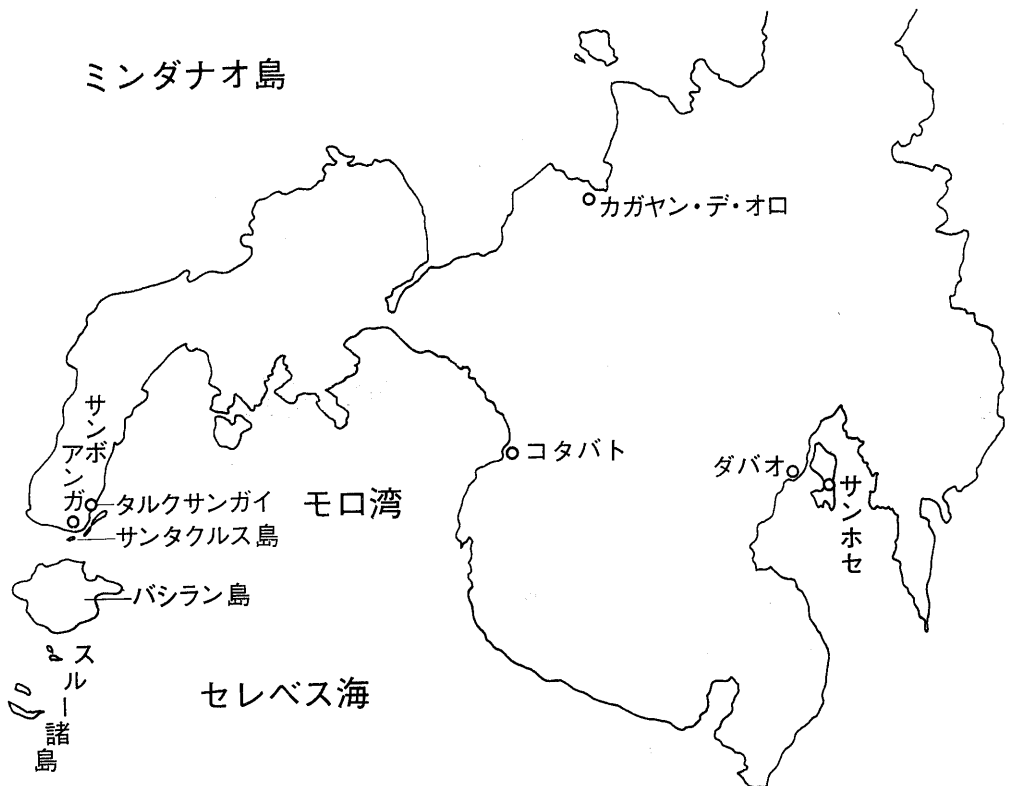
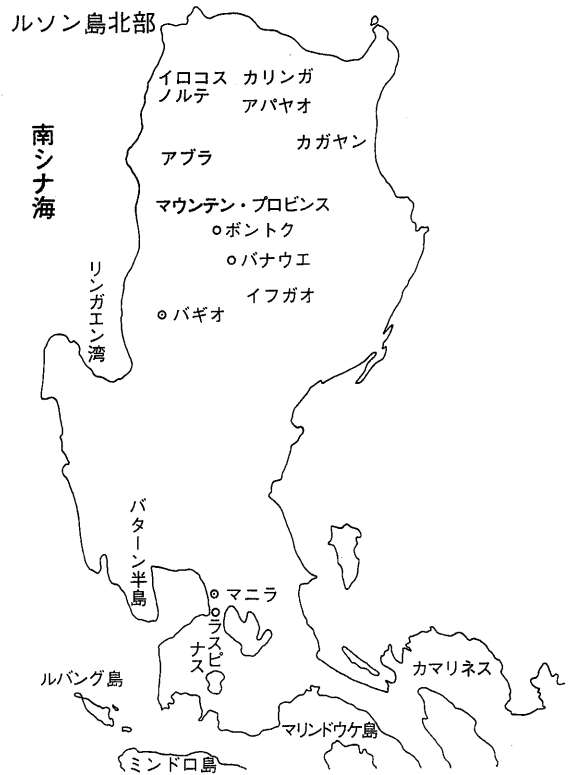
武蔵野音楽大学楽器博物館.

東京芸大90周年記念展示会.

世界楽器大事典，黒沢隆朝著，雄山閣，S52.

原稿受理 1979年12月20日





Musical Instruments of the Philippines

Hideo Yashiro

This paper introduces the major musical instruments and types of music found in the islands of the Philippines within an historical context. Basing my research on the classifications developed by Victor Mahillon, Erich M von Hornbostel and Curt Sachs. I investigated many native instruments during my stay in Philippines from 1978 to 1980.

The types of music presently found in the Philippines divide into the categories: music of Spanish influence, native tribal music, and Islamis music.

The Spanish brought their music with them when they came as Jesuit missionaries and merchantile adventurers in the 15th and 16th centuries. The Philippinoes who had little music of their own adopted the western music with very little change. Today Spanish music is the most universally appreciated music in the Philippines.

A native music, still found among the mountain tribes of Kalinga, Bontoc and Ifgao in the Northern Luzon island, long predates the coming of the Spanish. References in Japanese chronicles such as the *Nihon Shoki* to Tokara and Hyuga suggest a connection between the ancient countries of the Philippines and Japan. Judging from the music still played today, however, there seems to have been more influence from the south and west, such as India, than from the North, or from Chinese music. Typical instruments such as the kalutang, bunkaka, and gansa are described here in detail.

Equal in importance to the Spanish influence, is the impact of the Islamic invasions of the 10th century. In particular the southern islands such as Mindanao to which I went are still predominantly Islamic, there instruments of the Indonesian gamelan. The most important of these are discussed in the final section of this paper.

The various strains of musical forms are presented here in an historical and anthropological perspective under the following titles:

1. Classification of the musical instruments
2. Comparative musicology in the Philippines
3. The music of the Phillipines in the context of South East of Asia
4. Musical research on the cultural minorities in the Philippines
5. The musical instruments of the Northern part of Luzon Island
6. The musical instruments of the Muslines in Mindanao